

第36回日本分子生物学会・年会企画 アンケート 集計結果

ポジション別: ポスドク

回答者数: 145名

ポジションと研究分野に関する設問

回答者数: 145名

質問1. あなたのポジションは？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1 学部学生	0	0.0%						
回答2 大学院生	0	0.0%						
回答3 ポスドク	145	100.0%						
回答4 大学・研究所等の研究者 (助教、助手)	0	0.0%						
回答5 大学・研究所等の研究者 (講師、准教授)	0	0.0%						
回答6 大学・研究所等の研究者 (教授)	0	0.0%						
回答7 企業研究者	0	0.0%						
回答8 その他	0	0.0%						
合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問2. 専門とされている研究分野についてお聞きます。＜複数回答可＞

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1 生物系	115	58.4%						
回答2 農学系	19	9.6%						
回答3 医歯薬系	49	24.9%						
回答4 理工系	8	4.1%						
回答5 情報系	5	2.5%						
回答6 その他	1	0.5%						
合計	197							

※割合は合計を母数にして算出しています

第1部 研究倫理と不正についての一般的な設問

回答者数: 145名

質問3. ライフサイエンスにおいて、研究不正は大きな問題だと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	117	80.7%						
回答2	ある程度そう思う	21	14.5%						
回答3	あまりそう思わない	5	3.4%						
回答4	そう思わない	0	0.0%						
回答5	わからない	2	1.4%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問4. ライフサイエンスにおいて、研究不正は極めて稀なケースだと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	5	3.4%						
回答2	ある程度そう思う	37	25.5%						
回答3	あまりそう思わない	60	41.4%						
回答4	そう思わない	34	23.4%						
回答5	わからない	9	6.2%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問5. 研究不正を目撃などしたことがありますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	所属する研究室内で実際に目撃、経験したことがある	15	10.3%						
回答2	所属する研究室内で噂があった	9	6.2%						
回答3	近傍の研究室内からそのような噂を聞いた	44	30.3%						
回答4	具体的には聞いたことがない	73	50.3%						
回答5	回答なし	4	2.8%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問6. 研究不正は日本のライフサイエンスの現状や将来の進展に悪影響があると考えますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	107	73.8%						
回答2	おおむねそう思う	24	16.6%						
回答3	あまりそう思わない	10	6.9%						
回答4	そう思わない	2	1.4%						
回答5	わからない	2	1.4%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問7. 研究不正に対しては日本の現行システムは十分に対応できると思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	十分対応できる	3	2.1%						
回答2	ある程度対応できる	25	17.2%						
回答3	あまり対応できない	57	39.3%						
回答4	対応できない	49	33.8%						
回答5	わからない	11	7.6%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問8. 研究不正に対する当該研究機関による調査、報告は適当であると思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	適当である	3	2.1%						
回答2	おおむね適当である	42	29.0%						
回答3	あまり適当ではない	55	37.9%						
回答4	適当ではない	36	24.8%						
回答5	わからない	9	6.2%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問9. 研究不正の調査はどのような機関が対応すればいいと考えますか？ <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	当該機関(大学、研究所など)	41	18.4%						
回答2	研究費の出資機関 (文部科学省など)	52	23.3%						
回答3	第三者の中立機関	118	52.9%						
回答4	その他	9	4.0%						
回答5	わからない	3	1.3%						
	合計	223							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	55	37.9%						
回答2	おおむねそう思う	49	33.8%						
回答3	あまりそう思わない	21	14.5%						
回答4	そう思わない	5	3.4%						
回答5	わからない	15	10.3%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	20	13.8%						
回答2	ある程度そう思う	47	32.4%						
回答3	あまりそう思わない	48	33.1%						
回答4	そう思わない	23	15.9%						
回答5	わからない	7	4.8%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	十分だった	2	1.4%						
回答2	おおむね十分だった	40	27.6%						
回答3	あまり十分でなかった	48	33.1%						
回答4	十分でなかった	37	25.5%						
回答5	わからない	18	12.4%						
	合計	145							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	個人の問題	105	47.3%						
回答2	構造の問題	102	45.9%						
回答3	その他	15	6.8%						
	合計	222							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	教育	100	45.5%						
回答2	厳罰化	78	35.5%						
回答3	その他	42	19.1%						
	合計	220							

※割合は合計を母数にして算出しています

第2部 科学論文不正疑惑についての本学会の対応と年会ワークショップに関する設問

回答者数: 145名

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 十分だった	9	6.2%							
回答2 おおむね十分だった	42	29.0%							
回答3 あまり十分でなかった	29	20.0%							
回答4 十分でなかった	14	9.7%							
回答5 わからない	51	35.2%							
合計	145								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 やるべきである	58	40.0%							
回答2 ある程度はやるべきである	61	42.1%							
回答3 あまりやるべきでない	10	6.9%							
回答4 やるべきでない	5	3.4%							
回答5 わからない	11	7.6%							
合計	145								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 若手の倫理教育	61	17.7%							
回答2 PIの倫理教育	92	26.7%							
回答3 研究不正の背景	99	28.7%							
回答4 研究不正への対応策	85	24.6%							
回答5 その他	8	2.3%							
合計	345								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 学会の責任者	5	3.4%							
回答2 不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	82	56.6%							
回答3 トップジャーナルの編集者	30	20.7%							
回答4 研究費助成機関	13	9.0%							
回答5 その他	15	10.3%							
合計	145								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問1. あなたのポジションは？

回答者 番号	その他記述
	記述なし

質問2. 専門とされている研究分野についてお聞きます。〈複数回答可〉

回答者 番号	その他記述
※	行動

質問9. 研究不正の調査はどのような機関が対応すればいいと考えますか？ <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	警察
※	当該機関の中で調査をおこない、メンバーの中には中立を保てる学部からも人選をおこなうなどの工夫をしたら良いのではと思います。
※	ORI
※	関連学会
※	利害が生じない、国外の専門機関。
※	第三者の専門的知識を持つ中立機関
※	国外の研究機関
※	dicerの時の様な専門家委員会の立ち上げがいいと思います。再現性の得られないデータはねつ造してなくても認めないというスタンスがいいと思います。
※	検察庁

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	研究機関、大学、政府(行政機構)には、自己保身、責任転嫁および利害関係の存在などがあると思われるので、残念ながら自浄作用は望めない。したがって、善意の第三者による中立機関の設立は急がれるべき。当然、内部告発などの受け入れ体制は整えておかねばならない。
※	そう思う	内部で上司に不正を告発しても、上司が握りつぶすことを経験した。また保護されるべき不正を告発した研究者が、逆に追放される件を何度か目撃した。
※	そう思う	いじめ問題にしてもそうだが、内輪の恥を明らかにしても内輪の人間は損をするだけなので、極力隠す方向に力が働く恐れが強いため。
※	そう思う	当該機関に告発しても告発者の評価が下がっただけで何も解決しなかった事案を目撃した。
※	そう思う	所属研究機関では人間関係などがあり、対応しきれないと思う。実際、〇〇研の調査の外部委員の選定はかなり難航したと聞いています。もし自分が頼まれたら恨まれるかも知れないことはやりたくないと思う。
※	そう思う	ORIについてはよく知らないが、調査を行う場合は利害関係のない者で、研究現場を知るものであるべきであると考えている。同じ研究機関では自分が当事者になった時などを考えて徹底した調査は行えない。研究現場を知らない事務方では容易にごまかされたり、調査に協力する者に過度に説明の負担をかけることになり、結果として調査が進まないと考えられるから。
※	そう思う	当該期間に調査を任せると、組織防衛のために調査が甘くなり、隠蔽のリスクも生じうるから。
※	そう思う	予算申請にも関係するが、(完全な形は実現不可能だが)より「客観的」であることを目指すべきだし、目指すことが可能な組織を作ることにもっと予算を使うほうが、最終的にはコストは安くなると思う。
※	そう思う	雇用契約に縛られ、狭い業界で働いている以上、目撃した不正を告発することは現実には得策ではない。危ないヒト扱いされ、自分の研究者としての将来を潰してまで告発する必要があるのかと悩まれる。そんな労力を割くより、能力がある人であれば、他所の研究室へ移動するか職を変えるかすると思うし、その結果、さまざまな不正(およびハラスメント)が放置され、日本の研究教育環境が悪化し続けてきたと感じている。また日本の研究予算を握っている省庁職員の研究員評価の基本が『〇〇先生のお弟子さん』に縛られており、妥当な能力・処罰を客観的に評価できず、厳しい取締まりができていない。外部機関は当然必要。
※	そう思う	当該研究機関が行うと責任回避のために、十分な取り締まり、調査が行われないと考えられる。
※	そう思う	どの研究分野・人物とも利害関係のない調査・取り締まり機関は必要だと思います。そして、その取り締まり機関自体を審査する構造も必要だと思います。少なくとも、身内での調査だけでは、世の中の理解は得られないと思います。
※	そう思う	利害関係の無い独立した機関が、決まった基準で調査し、そのノウハウを蓄積していくのは有意義だと思います。
※	そう思う	ORIという組織は知らないが、そういう外部中立組織があるならまずは似た機関を設置すれば良いと思う。
※	そう思う	馴れ合いでもみ消す傾向が日本にはあるから
※	そう思う	中立機関の調査、勧告にもとづいて資金配分の観点からの制裁が加えられることが効果的と思われるから。
※	そう思う	少しでも利害関係がある人間が調査した所で、どうにもならない。
※	そう思う	外部中立機関が公正かつ客観的に調べたり取り締まるのが大切である。
※	そう思う	内々で調査をすると、調査漏れや不正をもみ消す恐れがあるため。
※	おおむねそう思う	内部機関だと調査が甘くなる可能性がある。外部機関に任せるためには当該研究以外の研究内容に対する守秘義務の遵守等が重要である。
※	おおむねそう思う	第三者の評価が必要だが、費用の面で可能かどうか疑問。
※	おおむねそう思う	できる限り中立かつ公正な立場での調査が必要なため。
※	おおむねそう思う	同じ研究機関内であれば、よい関係であれ悪い関係であれ、ある程度人間関係が存在する可能性があり、中立な判断が出来ないかもしれない。外部中立機関であれば、その点を回避することが期待できると考える。
※	おおむねそう思う	抑止力になる
※	おおむねそう思う	研究者間のなれ合いで隠ぺいされることが防げるから。
※	おおむねそう思う	研究者は忙しい。そういう仕事は嫌い。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	おおむねそう思う	ここ数年で多くの日本人による不正が明らかになっていますが、所属先は実情を把握しないで処分を下しているように感じます。もちろん時間がかかるのはわかりますが、クビにしたから調査をやむやみにして良いものではありません。雑誌側も捏造かもしれないものを訂正ですましているものが多々あり、特にNature誌などは最近ほとんどのFigureで訂正というものであります。こういったものに対して所属機関、雑誌、研究費の出資先がしらべても、自分達の身を守ることにのみこだわり、正当な判断が下せるとは思いません。私は、所属機関、雑誌、研究費の出資先に加え、ORIのような機関が調べるのが望ましいと思います。
※	おおむねそう思う	三権分立ではないが、その一機関に集中させるのではなく、他の機関も調査に当たれるようにするか、あるいは、この機関が調査機関を中立に指定する、という形が良いように思う。
※	おおむねそう思う	第三者機関で研究の内容まで理解できる人材を確保できるのか、という問題が残る。どこがどう不正なのか、見る力が無いとダメだと思う。
※	おおむねそう思う	理想的には外部中立機関があれば良いと思うが、実際に大学や研究所に対して強い調査権限を持つことができるかはわからないし、天下り機関がまた1つできたということになるだけのようにも感じたので。
※	おおむねそう思う	同様の分野や同一の所属機関にゆだねるには業務の負担と調査の公平性に問題が生じる可能性があるから。ただし、このような機関があまりに権力を持つと、弊害も生じてくると思います。
※	おおむねそう思う	ORIが良好に機能しているのかわかりませんが、外部中立機関があった方がよいと思う。
※	おおむねそう思う	どこの研究機関にも所属していない完全に中立で独立した機関であることが望ましいと思われるから。
※	あまりそう思わない	そこまで税金をかける必要はない。
※	あまりそう思わない	日本で「外部」「中立」などと言ったら、いかにもど素人が選出されそう。
※	あまりそう思わない	公正な調査および評価をおこなう専門性の高い人員の確保は、難しいのではないのでしょうか。
※	あまりそう思わない	独立機関として設立されれば、意味があるかもしれないが、そのような完全独立組織を日本で作れるかどうか、疑問を持っています。
※	あまりそう思わない	取り締まり局を作るほど大規模で不正が行われているわけではないから。
※	あまりそう思わない	日本においてORIの様な機関がどれだけ効力(中立的な立場から公正明大かつ詳細かつ迅速に調査が行えるか)があるのかわからないから。
※	あまりそう思わない	出資機関が厳正な調査を行えるのであればそれで十分である。
※	あまりそう思わない	研究不正をおこなう根本的なところは研究に対する姿勢と思想や成果競争における焦りなどがあるのではと思います。やはり主には学生教育に対する取り組みを重視する方が良いのではと思います。
※	あまりそう思わない	あってもなくても不正はおこる。そんな仕事に付いている人の社会に対する貢献という目線で考えると、非生産的なくだららない仕事を作るだけではないかと思えます。
※	あまりそう思わない	取り締まり機関設置に要する予算を、科学研究費にまわす方が生産的であるため。生物研究の目的は、自然真理を追求にすることにあり、他人の結果が真実かどうか(積極的な不正か、または研究者の偶然による誤認・エラーかの区別も難しい)、そのような作業に予算と労力をさく必要はない。
※	あまりそう思わない	天下りや癒着問題がある為
※	そう思わない	ただの天下り先
※	そう思わない	アメリカも日本並かそれ以上に不正が横行しているから。アメリカの研究機関から発表された論文で、再現できないデータに遭遇してしまい時間を浪費した辛い経験も実際にある。論文を取り下げた人でも、アカデミックに残れているアメリカの研究者がたくさんいるので、ORIという機関自体の存在が疑わしい。
※	わからない	ORIが何をしているのか具体的に知らない。不正を取り締まるとともに研究倫理について啓蒙を行ってくれる組織があるのは重要なことだと思う。
※	わからない	ORIをよく知らない。
※	わからない	アメリカのORIについて詳しく知らないのかわからないが、中立を保つことができるのか疑問。

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	研究者の専門家集団が学術的立場から不正な研究を排除するのが望ましいと思う。
※	そう思う	関連学会なら、調査委員に利害関係が薄く近い研究分野の者を調査委員もしくはその補佐に選ぶことができると思う。必ずしも学会が主導する必要は無いが、関わるのが望ましい。
※	そう思う	科学者の比較的狭いコミュニティーの中で、「あのラボのあの仕事は再現が取れない」等の話題は少なからず存在する。科学者の自浄作用として、自分たちである程度「グレー」な仕事を相互チェックすべき。捏造に基づく仕事(ビック)ジャーナルに生き残り、将来に渡って引用を繰り返される方が、トータルのコストは高くつくと思う。
※	そう思う	調査権限、というものの定義があまり明確ではないのですが、学会としては自分たちの科学性を維持するために独自の調査があつてしかるべきだと思うし、それに基づいた学会独自の見解について公表すべき、というかする必要があると思います。それによって学会に立脚した科学性の維持が可能になるであろうし、アカデミーとしての学会の存在意義が高まってくるでしょう。Peer reviewによって科学性が歴史的に支えられてきたなら、そして学会がその科学性の担い手であるとするなら、それを実践しないのはあまり科学的ではないのでしょうか。
※	そう思う	中立的な立場の調査が期待できるから。
※	そう思う	日本の研究業界は政治が深く絡みすぎていると思います。しがらみを薄めるにはみんなでよってたかって事実をはっきりさせた方がいいと思います。
※	ある程度そう思う	当該学会における研究発表の内容に責任を持つという観点で、ある程度必要なことだと思う。
※	ある程度そう思う	内部だけでなく、外部からのチェックが入る事で、隠蔽体質が減ってくれる事を切に希望する。特に、該当する学会で、不正に関した発表を行っているならば、報告義務を課すべきである。
※	ある程度そう思う	多面的な評価という意味で望ましい。
※	ある程度そう思う	学会として研究不正に対する姿勢を立場を明確にするとともに、研究不正が起った状況を明らかにして学会員や公に対して説明する必要があるため。
※	ある程度そう思う	専門知識を持って判断できる一方、大きなグループでは関係者が多くいるため中立性が保てるかどうか疑問も残る。
※	ある程度そう思う	中立的に、また下の若いスタッフを保護できるのであればそういったものを設立してもいいと思う。実際には難しいと思うが。大学などでも、本来、研究にかかわらない外部の人間が対策するはずのハラスメント対策委員を大学の研究にかかわる教授陣が占めているところなどでは、ハラスメント委員会がハラスメントをしているので、泣き寝入りする院生も多い現実があるのを直視し、研究に関わっている人が、果たしてどこまで不正に対して厳しく取り締まりができるのか、疑念を抱かざるを得ない。告発しても、告発した側が潰されて終わるだけなら、むしろなくていい。
※	ある程度そう思う	不正を起こした研究者に、専門家集団としてしかるべき社会的対応をとることは、学会という社会組織として研究不正に対峙する姿勢を明確にすると同時に、不正を起こした研究者に対しても制裁を加え、将来的な不正の再発防止に貢献できると考えられるから。
※	ある程度そう思う	第三者機関の調査には当該分野の専門家であり、かつ、当該問題と利害関係のない研究者の協力が不可欠であると思われる。そのような研究者を紹介する機関として学会が協力するのがよいのではないか。学会自体が第三者機関として調査を行うことにはどちらかというところと反対である(利害関係を排するのは困難なのではないか)。
※	ある程度そう思う	大学、文科省だけでなく、それぞれが、利害関係の異なる集団で行えるのが、望ましいと思う。
※	ある程度そう思う	法律的な不正なら警察や国税局が調べるが、学術的な不正については学会が差配しなければ誰にもできない。一般の方や納税者からの信を失えば、研究への国費の投入は将来続けられないことになる。
※	あまりそう思わない	個人の倫理の問題なので学会が深く関わらなくても良いのではないか。
※	あまりそう思わない	誰かがやらねば。調査したら見合う報酬が支払われるべき
※	あまりそう思わない	構成員が研究者のため客観性に欠けることと、負担が大きくなることで学会運営に支障を来す恐れがあるから。研究活動と監視・調査活動は切り離すべき。
※	あまりそう思わない	学会は当該分野研究者の集まりであり、もし不正調査をするなら利害関係のない、あるいは出資側が行うべきと考える。もちろん、研究内容の妥当性などには、学会のような当該領域の専門家でない判断が難しいという考えもあろうが、学会が主体的に不正調査のような学問追求と関係がない事案にかかわるべきでないと思う。
※	あまりそう思わない	不正は学会の問題ではないと思うので、調査に口をだす必然性は感じない。ただ、学会等で実例等も踏まえて啓蒙活動をしっかり行うことは重要だと思う。

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまりそう思わない	学会として、労力をさけるとは考えにくい。また、内部調査は大学でも行われる可能性があり、学会単位で行うにしても、調査内容に違いがあるとは考えにくい。
※	あまりそう思わない	学会発表や学会誌で不正があった場合は調査に関わるのが望ましいかもしれないが、そうでなければできないことは限られていると思う。
※	あまりそう思わない	無理だと思う
※	あまりそう思わない	目的と違う気がする。
※	あまりそう思わない	学会とは別の独立した調査専門機関を創設するべきだと思う。
※	あまりそう思わない	これまでの事例から、学会の理事や運営委員会の人間がその当事者(潜在も含めて)である可能性があり、調査が適正に行われたのか信用できないため。
※	あまりそう思わない	知人同士や競争相手と調査しあう可能性もあり、中立性を維持できていると外部に説明できないのではと思ったので。
※	あまりそう思わない	不正はしないのが当たり前だから。不正の発生は環境と個人の資質の組み合わせで偶発的に起こるものであるから。
※	あまりそう思わない	当該研究者と、調査に関わる研究者の利害関係の有無を客観的に判断することが難しいため。
※	あまりそう思わない	利害関係が発生する可能性が否定できませんので、調査協力にとどめるべきかと思います。そして、調査の際の協力義務や、偽証などに対する罰則などを設けるべきかと思います。
※	あまりそう思わない	・積極的に関わらないと、この分野の存続が厳しくなる・積極的に関わると、この分野にとって代え難い利益がある少なくともどちらか一方が無い限り、会員が時間と労力を割いてこれに関わるのは避けたい。会員が割かないなら、学会が専門のヒトを雇うことになるかと思いますが、それならばORIIに任せればよいかと思います。資金があれば学会で組織する事になるかとも思います。
※	あまりそう思わない	第三者の中立機関に任せるのがよいと思う。
※	あまりそう思わない	基本的にそういったことは専門の機関を設置して対応するべきで、研究の現場は研究に専念できる方がよいから。
※	あまりそう思わない	調査権限を有していない機関の調査には限界がある。
※	そう思わない	それは学会の仕事ではないと考える。適切な分業が大切。
※	そう思わない	学会にそのような権限をもたせるという考えを恐ろしく思います。学会員が不正を行った際に、政治的に正しい声明を出す程度でよいと思います。
※	そう思わない	学会の役割とは異なるから。
※	そう思わない	学会は不正取締り機関ではなく、学会員はボランティアで調査を行うには忙しすぎる。特に、Genes to Cells以外の学術誌の場合、調査するには限界がある。ノバルティスの論文不正疑惑における〇〇〇学会の対応をみても、同業者による調査は信頼を得にくい。
※	そう思わない	学会は調査ではなく調査の結果不正が認められた者やその所属機関に対して何らかの措置を取るのが望ましい。学会の運営のコスト等も考慮すると調査などが十分に行えるだけのリソースは学会にはない。
※	そう思わない	身内に厳しい団体、機関は遅かれ遅かれ衰退
※	そう思わない	関連学会では完全な中立性を担保できないと思われるから。
※	そう思わない	当事者と何らかの関係が疑われるので、不適切。
※	そう思わない	仲間内で調査しても何も効果はない。政治利用されるだけ。
※	わからない	外部中立機関としてよいとは思いますが、内部の有力者の意見で判断が左右されてしまう可能性も無いとは言い切れないと思う。
※	わからない	積極的に不正調査に関わるのは良いことだと思いますが、実際には調査に関わるためのメンバーの人数が難しいかと思います。
※	わからない	学会に出来るだけの余裕があるならそうすべきだが、現実問題として余裕があるのかどうか私には良くわからない。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	おおむね十分だった	本人が懲戒解雇にはなっているので良いのではないか。
※	おおむね十分だった	不正の程度によるが、悪質な不正に対してある程度十分ペナルティが果たされていると思う。
※	おおむね十分だった	大学としての対応としては、十分であると思う。それ以上行うには、多大な労力と時間を割かなければならず、大学だけの力では限界があると思います。
※	おおむね十分だった	間違っていたことを公表することが、後々のために最も重要だと思うから。
※	おおむね十分だった	真相を突き止めるのは難しい
※	おおむね十分だった	研究不正があったか否かの判断はある程度できていると思う。しかし、なぜ不正が行われたのかの原因を調べることで、およびその改善へむけてどのような対策が可能かは行われていないのか、情報が出てこない。
※	おおむね十分だった	大学や学部によってかなり差があるのではと思いますが、昔に比べてある程度の対応の指針がたってきた現在では大体の対応は無難なのではと希望的観測をしています。
※	おおむね十分だった	大学内部での調査は必要不可欠で、ある程度機能してきたと思うが、同分野他機関の研究者の意見や、中立機関の専門家の調査を取り混ぜるべき。
※	おおむね十分だった	時間が掛かり過ぎのキライがあるが、概ね不正に対して代償を支払っていると思うから。
※	あまり十分でなかった	不正をして解雇された教授が他大学で教授を続けていることが許されていることなど異常。悪質なものについては研究機関間での連携を持ち、責任逃れのために追い出すだけでなく、より厳重な対応を取るべき。
※	あまり十分でなかった	研究を主導する立場にない人が処分されたことがあり、同じ立場の人間として残念。
※	あまり十分でなかった	本人からの聴取で終わることが多いから。
※	あまり十分でなかった	正直、事実が明らかになったとは思わない。誰が主導したのか、なぜそのようなことが起こったのかを明らかにしてほしい。そして白日のもとにさらしてほしい。
※	あまり十分でなかった	見つかったからでは遅い。不正することがいかにくだらないことを理解させる道徳教育が大切。
※	あまり十分でなかった	ケースバイケースである。もみ消されたケースもあると考えられる。
※	あまり十分でなかった	不正した人の発言まで吸い上げていない
※	あまり十分でなかった	不正に関わった研究者が真実や釈明をあまりすることなく消えていくから。
※	あまり十分でなかった	研究不正が起こった原因究明とその後の対応について、情報公開が不十分と感じているため。
※	あまり十分でなかった	健全な対応ができないと思います。すべてとは言いませんが、容疑をかけられた当事者と対立する人物が調査委員会に入ったり、学内の政争のネタにされているような話も聞きますので、あらぬ疑いをかけられないためにも、利害関係のない外部がやるべきだと思います。
※	あまり十分でなかった	・双方の言い分を報告書に盛り込んでいない・不正をする経緯が不明瞭・雇用している側が調査する限界・時間がかかりすぎ
※	あまり十分でなかった	研究機関によって対応に大きな差がある。
※	あまり十分でなかった	誰が不正したのかではなくなぜそのような結果に至ったのか。どのように改善していくのかなど具体的な内容があまり周知されていないような気がするから。
※	あまり十分でなかった	調査結果報告などを公開していない、または簡単にはアクセスできないような場所に(隠すように)置いている。
※	十分でなかった	不正をした当事者が研究所に残り、不正の告発者が研究所をさらなければならない現実を何とかすべきでは
※	十分でなかった	融通の利かない研究費を融通の利く研究費として使うためであったなら、まだ同情の余地はある。しかし、己の利益しか考えていない私的流用に関しては、たった1度でも業界から永久追放処分にすべき。他の前途有望な研究者にそのポストを譲った方が遥かに有益である。
※	十分でなかった	〇〇〇〇グループの不正について、〇大の対応は極めて杜撰であった。
※	十分でなかった	結果的に不正をした人が明確な罰を受けた訳ではなく、不正により得られた利益の方が大きかったのではと思う事がある。
※	十分でなかった	大学により発表の仕方に違いがあるため、なにか隠しているのではないかという点が疑われる。また、研究者自身が表に出ずに退職するケースがほとんどだから。
※	十分でなかった	時に利害関係から適切な調査がされなかったと思われるから。そもそも裁判官でもない人が審判を下すべきではない。同じ犯罪を犯したら同じ罰を受けるなどの規則の整備もなされているとは思えない。
※	十分でなかった	不正を生じさせる構造的原因を追及して、抜本的な解決策を講じるべき。
※	十分でなかった	研究機関の科学者は、本業の合間を縫って調査し、その調査が調査者の評価に反映されるわけではない。この状態で十分な調査を期待する方がおかしい。
※	十分でなかった	いずれのケースにおいても、何故不正に至ったのかという原因の究明が十分に行われていないと考えられる。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	十分でなかった	これまでに話題になった〇〇大学、〇〇大学、〇〇大学などの研究機関の対応を見れば一目瞭然である。今後現在話題になっている〇〇大学(現〇〇大学教授)などのケースもそれが捏造なのか単純なミスなのか明らかにされなければならないと思う。
※	十分でなかった	まず、不正が見つかるということ自体が氷山の一角でしかない。表ざたになっていない事例は(特に大学などでは)山ほどあると思う。対応が十分かという以前に対応できていない。不正疑惑で問いただされた教授が「私は知らなかった」などと言っている(本当にそうである場合もあるだろうが、教授があまりに横暴だった場合は教授に問題があると考えられ)が、責任者が知らぬ存ぜぬで済まされるので皆もそうするであろう。そのあたりの教育(教員教育)がなっていないのも問題だとずっと思っている。教員と言う立場で仕事をする以上、あなたにはしかるべき責任が生じ、問題があればあなたが責任を取るようになるのですよと叩き込んで欲しい。
※	十分でなかった	関係した人が辞めるだけでは不正はなくなるから
※	十分でなかった	内部調査では不適切。
※	十分でなかった	不正をした人間が普通に今でも給料をもらって研究の世界にいること自体が全くもって理解できません。そういう点で、不正をしたらどん底に落ちるんだという環境が必要だと思いません。
※	十分でなかった	不正に関わった人がまだアカデミックにいるから。現状を鑑みると、日本の学会は不正をしても問題ないと国内外に発信している状態。「いくつかの不正」という質問自体が日本の学会の認識の甘さを物語っている。すでに「たくさん研究不正」が見つかっている。
※	わからない	対応の経過についてそれほど詳しく調べたことはないが、対応の仕方はあまりオープンになっていないという印象を持っている
※	わからない	これまで不正発覚後の処分等についてあまり詳細に知らないから。
※	わからない	具体的な事例を良く知らない。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題	能力の無い者の自己顕示欲や、人格的に問題のあるPIからの圧力等に起因するのではないか。
※	個人の問題	他人より良い論文を書こうとか、昇進しようとする心がそうさせてると思う。このような気持ちを持って研究をすることは重要だが、手段として不正を用いるのは断じて良くない。
※	個人の問題	確かに体制の構造的欠陥はあるが、研究者のモラルが高ければ絶対にこのようなことにはならない。一部の生きるに値しないゴミ研究者がこのような深刻な状況を生んでいる。こういうゴミは、体制を整備しても抜け穴を探して不正を行うと思う。人間性の問題。
※	個人の問題	構造的問題も捨てきれませんが、競争が激しくなかった昔からも不正はあったと思われます。研究不正の件は、個人の研究に対する姿勢が根底にあって、激化する競争のなかで不正をおこなうか、しないかという差は非常に個人に依存する問題ではと考えます。
※	構造の問題	不安定なポジションが、不正を増進する。成果主義がすぎる。早急に成果が求められ過ぎ。
※	構造の問題	研究費の一部が余ったら、プロジェクトの期間が終わっても別の研究に使えるようにすべき。安定的に研究費が確保できない仕組みは不正を助長する。
※	構造の問題	論文としての成果が重用される世界においては、起こりうる問題だと思います。研究をサポートする技術者の育成またはその雇用形態の改善などの研究者の負担をより軽くするような制度づくりの方が、仕事に専念できる環境を生む事で、不正に手を染めることが少なくなるかもしれません。
※	構造の問題	科学研究において、真理は変えることはできず、不正はいずれ暴かれるものであるという事もっと周知なくてはならない。もちろん、これには統計学の知識・技術を十分に身につけさせるということも含まれる。
※	構造の問題	論文に関しては短い期間内で論文発表しないといけない状況は研究不正に少しは影響を与えているのではないかと思う。
※	構造の問題	結果を出せないと、研究者として雇ってもらえなくなるから。
※	構造の問題	論文を出すのが大変すぎる。金と時間がかかりすぎる。
※	構造の問題	一般には個人的な利益のために行ったと考えられるだろうが、研究費の減額や、プロジェクトにおける成果の評価が論文に過度に依存している現状では、不正を防ぐ対策も意味を成さない可能性が高い。
※	構造の問題	トップジャーナルの編集者が、論文の新奇性を重視する一方で確実性を軽視していることが、捏造を行う動機を高めているのではないか。
※	構造の問題	昔は財産に余裕のある人が、趣味の延長上で科学をしていたと聞いたことがある。現在の状況は、研究成果が研究者の生活と直結してしまっている構造が多いと思われる。そのような状況下では、自分の生活のために不正に走るケースが出てくるのは必然なのではないか。
※	構造の問題	論文の数が重視される評価制度が不正を助長していると思う。
※	構造の問題	最も問題なのは、研究者に(ポジティブな)研究成果を常に求めるものの、ネガティブデータの発表等も含めた研究者の研究倫理的な誠実さはあまり評価しない現在の学界、ひいては社会そのものである。ここら辺の意識が改善されれば、研究不正をするモチベーションやインセンティブそのものがなくなるし、更に、ほとんど読む価値のないゴミの様な論文の洪水もだいぶ緩和されるだろう。
※	構造の問題	競争の激さに加えて、研究業績以外に個人を評価するものがない。
※	その他	社会の研究環境が悪くなり、競争が激しくなるとこうなる。
※	その他	(上述)
※	その他	短期で業績を求める傾向にある。実際に若い人は業績を出さないと職がない。(コネがある人を除く)
※	その他	ある程度は個人の資質もあると思われるが、そうせざるを得ない状況に追い込まれることはあるのではと想像されるから。
※	個人の問題/構造の問題/その他	科学に対する興味ではなく、出世欲・権力欲のみで研究している個人がいるのも確かで、しかし、それを若手が身の危険を感じずにオープンに相談できる体制は日本にはない(世界にもないのかも知れない)。結局はねつ造強要というハラスメントに耐えるか、別の研究室に移るか、研究を捨てるか。いままそのねつ造強要(そして一部はねつ造されたであろう)教員たちが教授として研究室を持っている現状を見れば日本の科学研究体制がどの程度でしかないかということがわかる。彼らのそういった気質を問いただし、改善させるための罰則もない。不正が出るラポでは得てしてハラスメントも横行しているので表面化されにくく、横行するのである。
※	個人の問題/構造の問題	競争あるところに不正あり。
※	個人の問題/構造の問題	現在の成果主義に基づく構造の中で、精神的に弱い人間(個人)が不正に走ってしまうのだと考える。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	ポスの無茶な要求やパワーハラスメントが、研究現場で不正を誘発する一要因となっていると思う。
※	個人の問題/構造の問題	名誉獲得、ポジション獲得など個人的な欲望に基づく問題であるとともに、間違った業績主義に基づく科学体制の構造的な欠陥が原因である。ある意味、両者は不可分である。
※	個人の問題/構造の問題	個人の問題ではあるが、それを周りが見過してしまう構造が最終的には問題だと思う。研究不正の根源にはインパクトファクターで業績をはかっている評価法に問題があると考えている。論文引用数など、1つ1つの論文を多数の人間で評価する方法の確立が望ましい。ネットを利用すればそれが可能になるのではないかと思っている。
※	個人の問題/構造の問題	短期間で業績を求められ、業績がでないと次の職に就けなくなる、この切迫した環境も一理あると思います。しかし、そこで不正をするかどうかは個人の問題だからです。ですので、両方の問題だと思います。
※	個人の問題/構造の問題	論文の内容よりもインパクトファクターや論文数が重視されすぎるためか、再現性の担保されていないデータが多すぎる。捏造や不正が疑わしいケースも多いが、それを証明することは難しい。たとえ、証明ができたところで、その仕事の評価されることはない。科研費の審査過程が不透明。捏造とは言わないまでも、前回に再現性が疑わしいと評価されたプロジェクトに、再度同じ研究費が支給されている例がある。
※	個人の問題/構造の問題	不正を行った個人に問題があるのは当然ながら、構造の方にもそれを助長する側面があるのは否めません。現場で研究を行う下(主に学生)には、早く成果を出すようにとの多大な圧力がかけられ、精神的に追い詰められることもしばしばです。その一方で、当該学生がアカデミックに残らない場合、不正により成果が出たように見せかけてとりあえず苦境を逃れれば、卒業後にそれが発覚したところで主に困るのは卒業前の所属研究室であって当人ではありません。結局のところ、上の人間が科研費・ポストを獲得するために、下の人間が成果を出すことを必要とするシステム自体が不正の温床となっているのではないのでしょうか。
※	個人の問題/構造の問題	過度なプレッシャーに負ける人もいます。常に不安定な雇用体制も問題。
※	個人の問題/構造の問題	特定の個人の性質の問題である場合と、上司からの圧迫が個人の性質と合わさったときに起こる例を見ました。
※	個人の問題/構造の問題	一言で言うと、いいジャーナルに出せば、「ポジション」も「研究費」も「名声」も得られるという現在の科学会の構造に起因することは間違いない。
※	個人の問題/構造の問題	現在の過度な成果主義的な評価法が研究不正の根本原因であると思う。アメリカ型の競争的資金配分は日本の研究にはなじまないのではないかと。一方で、外部や上司から圧力がかかっても、不正を行わない者は行わない。最終的には個人の問題であるとも言える。
※	個人の問題/構造の問題	〇〇大学のケースなどを見ると数十個の捏造疑いが存在し、ほとんどに名前が載っているのはポストだけという状況である。これは明らかに組織的に行われたものであり、筆頭著者ならびに責任著者が知らないと言うことはあり得ない。過去の〇〇大学のケースのように筆頭著者が複数の研究機関にまたがって捏造をしたというものもあり、これは個人のケースである。いずれにせよ、個人の問題が強いとは思いますが、組織構造できな欠陥も否めない。
※	個人の問題/構造の問題	好き好んで不正しようという人は稀で、個人のモラルの問題とは一概に言えないと思う。PIが研究外活動に忙殺され、学生やポスドクの不正に気づかないこと。直接学生の面倒を見る助教やポスドクに、論文執筆における責任と権限が少ないこと。任期付では仕方が無く、自分の研究で手一杯。ポスドクの過度の競争。
※	個人の問題/構造の問題	個人の安易な功名のこともありますが、教授・上司からの成果に対する執拗な嫌がらせやハラスメント、非正規雇用に端を発する、成果を出せなかった場合の生活・雇用不安など、色々な原因があると思います。
※	個人の問題/構造の問題	成果至上主義、これに基づく研究費の集中・ポストの問題。成果が出なければ、研究費が取れない。成果が出なければ、職に就けない。研究費、職の為に研究する。しかし、成果が得られないと、全てが無くなってしまふ。これを恐れて、不正に走ってしまう。不正をしたいと思っている人は、殆どいないと、信じている。
※	個人の問題/構造の問題	近年になって増加傾向にあるのかどうかの統計情報がないため、確かではないが、研究者の雇用状況が厳しいことが、そのような状況をつくりだしている可能性は考えられる。したがって、基本的には、個人であるが、構造の問題が助長しているかもしれない。
※	個人の問題/構造の問題	もともと自己顕示欲が強い人間(研究者の多くはそうかもしれない)の中にはある程度の確率でそのような不正をするものは出てくると思うので個人の問題という側面はあると思う。ただ、現状の研究費および研究職位を競争するシステムは(上司からの圧力という面も含めて)、そのような行為を生み易くしていると思うので構造上の問題もあると思う。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	個人的にも科学研究体制的にも、短期間で研究成果を求められるようになってきている。研究は予想通り進まないものですし、予想外の所から新たな発見も生まれるものです。
※	個人の問題/その他	以前ならば、ある程度手計算を用いたり、自分で数式を作成して実験結果をまとめることが多かったが、今はなんでもソフトウェアがクリックひとつでやってくれるようになった。また、以前は卒業論文、学位論文などを手書きで作成し、図をステンシルで作成する、スライド作成のために写真撮影を行ったり、原図をカメラやに持ち込むなど、研究成果をまとめるための「手間」「労力」があり、それらが相対的にデータの重み、研究成果をまとめることの責任感の構築にもつながっていたように思うが、現在の過度な自動化、電子化が進んだ論文作成、査読の状況では、そのように研究を尊重する意識が薄れてしまうのではないか。
※	構造の問題/その他	人の言葉や実験結果を、批判的にとらえる習慣を持たない研究者が多くなったと感じる。そういうトレーニングが重視されていないとも思う。そのため上司の言いなりになる部下ばかりとなり、不正が見逃され、正される機会もなく拡大する。トップダウンは一見効率的に見えるが、瞬間的にそう見えるだけで、実際にはブラックな支配が蔓延することにつながる。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者 番号	その他記述
※	両方の問題だ。
※	一概に言えない。個人の資質の問題もあるが、極端な業績重視の研究社会の構造的な問題も大きい。
※	自分自身の経験として、研究倫理に関する教育が大学等で十分なされているとは思えない。また、大学等における教育の質にばらつきがあるように思う。
※	どちらとは言い難い
※	その両方。自身の我欲からか、ねつ造を強要するような指導教官や教授に当たった場合、どこにこれを相談したら、いいやら悩んだが、そんな構造にはなっていなかったから。
※	その両方だと思います。
※	個人と環境の組み合わせである。
※	両方。構造に欠陥があるからといって、かならずしもやっても良いわけではない
※	研究室の慣習、上司等からのプレッシャー、雇用不安(目に見える実績(論文)がないと次のポストが無い)
※	個人と体制の問題
※	実験手法や論文作成の電子化が進んだことで、研究結果をまとめた文書や図表に対する価値観が変容しているから(すぐに修正、改変、創造できるという感覚)。
※	教授と名のつく人の7割は無能だと思います。そうした現状で、ポジションを得るにはバカでも黙る業績を積み重ねることで。そうすると必然的に業績至上主義になってしまい、興味のない研究をしたり、general interestに流され、ねつ造しても何とも思わなくなってしまいます。本来研究は面白いからやるのであって、飯を食ってくためにやるものではないです。面白いならばねつ造なんて思いもつきません。
※	両方の意見が正しいと思います。個人の問題である側面もありますが、絶えず論文発表としての成果をもとめられていることがプレッシャーになりそのような引き金になっていることもあると思います。
※	両方。構造としては、一定の期間内に、論文をだすことや、若手重視といった年齢制限をもうけていること。
※	成果主義に基づく現在の科学行政は、長期的な学術の成長という面に対して、致命的なダメージをもたらしている。手柄ほしさに不正に手を染めてしまう一部の個人を、思いとどまらせるのではなく、むしろ助長する構造的な要素が増えている。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育	厳罰するなら、隠蔽がバレないようにさらに隠蔽しようとするのが人の心理だと思う。
※	教育	厳罰化には賛成しかねます。理由として、第一に、写真をフォトショップで改変して使い回すようなお粗末な不正ならともかく、実験を行う人間が本気で捏造した場合、共同研究者であっても見破るのは不可能に近く、結局は各研究者の倫理観に頼らざるを得ないと思われます。また、実際には不正と知らなかった共同研究者の研究も停止するのは科学の進歩にとって有益ではないと思います。第二に、下の人間が成果を出さなくてはならないというプレッシャーに負けて捏造に手を染めるような研究室では、学生が内心で研究室を恨みながら卒業・中退することも多いと考えられ、そのような場合、研究室やPIIに対する厳罰は抑止力にならないと考えられます。
※	教育	そもそも研究を志す人は純粋で正直な人だと思う。そして、不正をし続けることはできないということもよく解っているはず。なのに、不正をやってしまうとすれば、そこにあるのは悪意ではなく、何かにつめられた恐怖からではないか。不正をしても、いつか他の誰かが真実にたどり着くので、意味がないということ、学生が研究室に配属される前に教える。
※	教育	厳罰化は確かに直接的な効果はあると思うが、それをしてしまうと今度は逆にそれを利用して他人を貶めたり、故意ではないミスについても立証する為に多くの労力を使うようになってしまったり、研究の自由な発展を妨げる可能性があるから。
※	教育	Q13を選んだ理由にも当てはまるのですが、結局は個人のモラルの問題が大きいのではないかと思います。
※	厳罰化	教育してどうにかなるといものではないと思うから。個人の性質の問題。
※	厳罰化	不正を行った研究者は、学術研究分野から退場していただくしかない。
※	その他	研究者への啓蒙活動も必要だが、不正を引き起こさざる負えない社会的な環境整備の方がさらに重要。
※	その他	論文審査時に実験ノートや生データの開示を積極的に求めてゆくことも必要だと思う。
※	その他	私的流用を企む金の亡者は論外として、大部分の不正は研究費獲得の構造的欠陥に起因していると思われる。ならば、その問題の根幹を変えるのが一番の対策である。もっとも、それは簡単なことではないだろうが。
※	その他	入り口でサイコパスを可能な限り排除する。また、そういった人間を絶対に出世させない。
※	その他	罰すればどうなるというものでもなく、教育すればどうなることでもないと思います。不正をするのは論文をたくさん出さないととかそういう切迫した気持ちから来ていると推測するので、そういう切迫感を減らす必要があると思います。任期や短期予算などで研究者が長期的な研究が出来なくなっており、これが短期間に論文をたくさん出さないと、という切迫感へつながるかと思うので、この雇用システムや予算システムが問題だと思います。
※	その他	科研費の支給や人事や採用面での研究評価方法の改善。インパクトファクターや論文数ではなく、研究の内容で評価されるべき。
※	その他	教育や厳罰化、監視体制の強化などでは不正は絶対になくならない、不正をしてまで研究成果を水増ししても、自身の評価を高めるためには意味がないという状況を作らなければ、不正は永遠になくならない。
※	その他	研究テーマや研究者の評価においてジャーナルのIFではなく個々の論文への評価を重視することで、無理にトップジャーナルを狙いに行く傾向を抑制する。
※	その他	研究者はバカではない。不正がバレない＝一生安泰。不正がバレる＝一時的な問題。この比較から不正を起こすほうがメリットが多いということがわかっていく。だから、不正がバレたら一生の問題にさせるか、もしくは不正がバレなくても一生安泰にならない状況にすればいい。後者のほうが現実性があると思う。高IFの雑誌への論文掲載数だけでなく研究指導者としての実績、共同研究数、etc.をキャリアアップの評価とする。不正がバレてもバレなくてもキャリアに差がないなら不正を起こす動機は減るだろう。
※	その他	おそらくいろんな対策をしても、かならず一定量の不正は発生するのが、世の中というものであるから。
※	その他	研究者の身分が保証されていないと、どっしりと腰を落着けた長期的な視野を持った研究をすることが難しい。研究の不正を行っても誰も得をしないような構造を作ることが理想である。
※	その他	研究者の受け入れ先の問題を改善すること。
※	その他	いくら教育、厳罰化に力を入れても、追い込まれて不正に手を出す環境がなくならないと思われるから。
※	その他	Q13 の回答参照。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育/厳罰化/その他	不正を行う原因として、学生などが教室主催者から極度のプレッシャーをうけて行うものと、教室主宰者自信もしくはその意向を受けたスタッフが、研究費獲得、良いジャーナルへの掲載を目的としたものがあると考えられる。後者は厳罰にすべきだが、前者は駆け込み部屋などをつくり第三者機関の調査をいれるなどシステムを構築する必要がある。
※	教育/厳罰化/その他	日本版ORIの設立
※	教育/厳罰化/その他	まず、教育者といはいかようにあるべきかということ、研究教育に責任が大きい、教員職に就いた人間にその職レベルに合わせてきちんと講義することが本当に必要だと思う。特に、不正をさせるようなことをしてはいけないと教えることは、横行しているハラスメントの抑止にもつながると思う。またその講義を単なる、通過儀礼(とりあえず出席すればいい)などとせず、実際にその理念に反した場合にはしかるべき処罰をもって現実に厳しく対応するという中立機関を設立させるべき。旧体質の人間が抜けてゆけば、日本を見捨てた有能な人材も海外から戻って来やすくなり、日本の科学将来も少しは明るくなるのではないかなと思う。
※	教育/厳罰化/その他	教育や厳罰化も必要ですが、データを厳格化することも必要かと思います。悪意はなくても、未熟なために、「再現性の確認を怠った」、「作成したマウス・ベクターなどの材料をきちんと確認しなかった」、データの処理方法を間違えた、など、悪意はないのに結果的に嘘を発信してしまうこともありますので、そのあたりを防ぐルール作りも必要だと思います。
※	教育/厳罰化/その他	小中学校の教員でさえ一定期間で適性をチェックされるのに大学の先生がされないのはおかしいと思います。もう少し「博士」と呼ばれるにふさわしい人を教授に据えるシステムを構築するためにも一定期間ごとに専門分野に関するテストを行って、高校の教科書すら理解できていないような教授は排除すべきではないでしょうか？
※	教育/厳罰化	PI、ポスドク、院生に教育が必要。分生はそれをやってきた。各機関でもすべき。授業、セミナーなど
※	教育/厳罰化	外部からの判断を含めた事実確認と評価 不正の告発者の保護
※	教育/厳罰化	厳罰化については、どのような状況で不正が行われたのかを調査を尽くした上で直接不正を犯した人物を処罰するべきである。P.I.が主導したのならP.I.が処罰されるべきであり、P.I.の影響のもとに不正に巻き込まれた研究者まで処罰する必要はない。不正を犯したP.I.よりも部下が犠牲になることは許されてはならない。
※	教育/厳罰化	意図的なものは論外であるが、それも含めて大学院の授業で「研究倫理」について実例を交えてちゃんと教える。意図しなくても結果としてなっちゃう不正とかは知らない人も結構いると思うので。そういう教育をしっかりと浸透させ、「やるなよ！」というコンセンサスを科学界全体に作った上で、それでもやった人は厳罰。
※	教育/厳罰化	研究不正を行ったら、どのように罰せられるのかを明確化すると不正は減ると思う。また、大学の学部から研究不正に対しての教育が必要だと思う。学部生は指導教官に命じられるままに実験を行って、求められる結果を出そうとする傾向がとても強い。
※	教育/厳罰化	適切な教育により、指導教員などから消極的な捏造(不適切なサンプル・データの選抜や統計処理)への誘導に学生が抵抗することが出来るようになると思う。厳罰化も有効だと思うが、適切な調査と一体で行われなければならない。
※	教育/厳罰化	教育は間違いなく重要。しかし、これまでも十分に成されてきたはず。実際、私は指導者から十分に教育を受けた。おそらく他の研究者も教育は受けているはず。それでも不正が行われるのは人間性の問題だと思う。このような悪人には極めて重い厳罰を科すべきだと思う。不正が発覚した場合、関連した論文と実名をすべて公表し、以後不正に関与した研究者も含めて永久追放をするべき。犯罪者であるということを目覚めさせる必要がある。
※	教育/厳罰化	教育を重点的におこないますが、やはり調査委員会などの発表ときちんとした対応が同じく重要だと思います。調査委員会からの発表がきちんと実施されるのであれば、公表された時点でかなりの罰を受けることになります。
※	教育/その他	PIに教育の時間を与えるため、ラボマネージャーを公費で設置するべき。教育活動などで評価されて研究費をとれるシステムがあっても良い。短い任期内に論文が出なければ次の仕事はコンビニバイト、という構造を改め、ポスドクの任期を延ばす。
※	教育/その他	不正がダメなのは当たり前だが、なぜそのようなことをするのか、予想した結果が出ないことに対する考え方(認識)の教育が必要。PIですらわかっていない可能性がある。
※	教育/その他	上司からのプレッシャーから来るものも多いと感じるので、教育といってもPIクラスの教育が足りないのだと思う。
※	教育/その他	研究者の評価方法の見直し、雇用の安定化
※	教育/その他	ご参考まで http://am.ascb.org/dora/ The San Francisco Declaration on Research Assessment (DORA)

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者 番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	厳罰化/その他	特に基礎に関する民間のサポートが日本では限定的であり、国家による薄く広い手当、特に若手に対する、が必要。
※	厳罰化/その他	辻褃のあわない画像操作等は厳罰化(論文撤回、学位剥奪等)。他のラボからの重要な仕事に関して、追試+ α の仕事であっても受け入れる雑誌があれば良いと思う。
※	厳罰化/その他	特に何かをしたいという訳でもなく研究をやっている人が多いのでこういう状況になっている。しっかりした研究テーマを設定できずに、流行だけを追い、インパクトのある成果を挙げようとすると、自然と現実から離れた再現不能なデータが欲しくなる。こういうタイプの人は教育しても無駄である。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	潤沢な研究資金
※	研究の透明性を高める
※	ポジションの安定化。
※	PI、ポスドク、大学院生等が一体となって、研究不正を許さない雰囲気各研究室内で醸成されることが望ましい。
※	学会等における批判精神の醸成。過度なポスト争いの緩和。
※	研究費獲得の仕組みを変える
※	研究者に対する十分な研究資金と研究環境の構築
※	採用・昇進の厳格化
※	不正をしてまで論文を出さないといけない、と考える環境を変えること。
※	安定的な雇用。
※	解決策として万能とは言えませんが、科学者私生活、研究生活のQOLの向上も解決に必要な場合があるのではないかと考えています。
※	内部告発の奨励と内部告発者の保護。また言われない内部告発を審査する中立機関。
※	再現実験が中心の仕事もある程度評価する。
※	過度に成果を求めない研究環境の整備
※	研究費の出資から研究成果の評価に至るまでのシステムの改善
※	研究者評価の改革と査読システムの透明化
※	研究者のキャリアアップを多角的に評価させる。
※	教授クラスに対する教育、および罰則強化。
※	科学データに対する認識。
※	雇用環境の安定化
※	PIクラスの方々の研修
※	現状程度でよい。
※	研究室・研究機関・国レベルでのデータに対するルール作り
※	研究者の身分の保証
※	データ再現性の確認システムを構築する。
※	一部の雑誌で実施されているように、論文投稿の際に生データを開示する。フォトショップ等による加工前の画像など。
※	チェック体制の構築
※	研究者を取り巻く環境の見直し
※	不正が起きない環境づくり
※	無能な教授陣をクビにすることだと思います。
※	社会意識の改革。(教育よりも広くて深い)
※	受け取った研究費と給与の国への返還。真面目に研究している人へ還元するべき。
※	研究不適合者の排除
※	研究グループ内の風通しを良くする・民主的な運営を行う。研究の評価にあたっては、インパクトファクター盲信を避ける。
※	構造改革

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	不正を起こしたならば自然と淘汰されるし、内部機関の調査によって職を追われることになるので、現状でも処分は適正になされていると思う。これ以上の厳罰化は必要ない。研究倫理を高く保つような研究環境の整備が必要。
※	グレーゾーン、具体例を発信してほしい
※	学会だけでなく、教育機関である大学(少なくとも大学院)で研究倫理についての授業を義務化したほうが良いと思う。そのために、不正を取りしめ管理する機関を大学あるいは研究所内に設置し、その人達が各研究科の授業に赴き丁寧に説明をする。また研究室単位で言えばポスが年に1度ぐらいは研究不正についてのレクチャーを自らまたは上記管理機関の人を招くなどして行ったほうが良いと思う。歳を取ってくると「また同じ内容」と思うかもしれないけど、聞かないよりはマシだと思う。RIや組換えDNAの講習会は毎年あるのと同じで、「不正防止について」の講習会が毎年あると少しは意識が変わると思う。
※	「こんなの(データ改ざん)皆やっている。」「ここに点(未測定データ)を加えても違和感がない。」と平然と学生に指導する大学教員がいる。その教員は、同様のことを言われてきたり見てきたから、自分もそうしているのかもしれない。これをマンツーマンでディスカッションしている時に学生が言われたら、どのような気持ちになるだろうか。良心の呵責に耐えきれず精神的苦痛を味わうのではないだろうか。学生はこの相談を誰にしたら良いのか。ほかの教員であろうか。指導教員に知られた時の危険を感じてためらうかもしれない。相談された教員は信じるだろうか。彼らの言うデータ改ざんは、おそらく科学的に何も覆さないだろう(元のデータから得られる解釈と同じ)。だからこそ、平然として言うのだろう。もう一度やるには時間や費用などがかかるし、結果の解釈は変わらないのだから。しかし、そんな倫理観に欠如した行為に慣れてしまえば、いずれ大きな改ざんをしても何も感じなくなるだろう。根本的に倫理観を改める必要があると思う。
※	不正が行われた研究、またその成果を発表した論文の共著者全ての恒久的な研究費の停止が必要。
※	研究者であれば不正は本来したくない。けれど、周囲で不正を行っている者が先に評価され、ポストを得ている状況を目の当たりにすると悩んでしまう。なぜ、不正が生まれるのかを考えると、トップジャーナルに載るためだというのが一番多いと思う。つまり、今の研究に対する評価方法が破綻しているせいだと考えられる。適切な例ではないけれど、フェイスブックのいいね!のような世界中の不特定多数の人間(一般人も含めるとより良い)によって評価がなされれば、インパクトファクターによる評価よりも純粋で正確な評価がなされると思う。
※	研究不正や研究倫理がどうのという前に、なぜそれがおこってしまうか、その理由を明らかにする必要があると思います。その大きな理由は、論文を出さないと、という切迫感だと思っています。論文を出さないと職がなくなって食えなくなってしまうかも、論文を出さないと予算がとれなくて次の年研究出来なくなるかも、という差し迫った危機が研究不正や研究倫理の問題へとつながっているのではないのでしょうか。不正を防ぐための教育や厳罰化の前に、不正が出ない環境作り、研究者が落ち着いて研究が出来る環境作り、こっちのがより大切かと思えます。
※	不正して得られた結果が、後に影響を与えることを想像できるように教育してほしい。問題は「現在」ではないと思う。不正の結果が存在するために、否定されてしまう結果や投稿論文があることが想像でき、科学の進歩に与える打撃は大きいと思う。研究不正は金銭的な事象と関連していると思われるニュースもあり、純粋な研究倫理としての問題だけではないような気がする。
※	研究不正とは少し異なるが、最近社会でEM菌、放射能でチョウに異常、奇跡のりんごなど生物学にまつわるニセ科学的なものが氾濫していることについて、生物系の学会として、なんらかの意見表明があってもいいかと思っています。
※	このような問題意識を共有することはまず一步として重要なので学会として色々積極的にやって欲しい。学生などは例えばPhotoshopで画像をいじる際、どこまでがやっていいかなど知らないのもその様な教育もしくはガイドラインを学会のホームページに載せて欲しい。
※	過剰な成果主義や、研究者が研究以外の業務に忙殺されてスタッフや学生と十分なコミュニケーションをとれていないことが最大の要因ではないだろうか。以前ならもう少し精神的にも時間的にも余裕があり、論文の著者が互いにデータの質を検証することも出来ただろう。今は限られた時間の中で成果を求められるあまり、多少疑問のあるデータでも黙認してしまうことが積み重なって、研究不正につながっていくように思える。焦る気持ちが交通事故を生むように、研究も結果を焦ることで事故(不正)が起きているのではないだろうか。精神に余裕がないと研究倫理も充分に働かないと思う。
※	不正が発覚した研究者に関しては、すべて公表し、罪を償っていただきたい。
※	厳罰化しても効果はない。なぜ不正が起こるのか、その原因、不正の土壌をよく解析すべき。
※	なにが不正であるのかを(ある程度)明確にする必要があると思う
※	学会が実際に調査や罰則の設定などを行うことは現実的に考えて難しい。不正が起こる原因を議論し、不正をなくすために必要なシステムを提案し、論文誌などと協力しつつ、学会として大学や研究機関に対してシステムの改善を要求すべきである。
※	研究不正や倫理に関しての学会からの取り組みは長期的展望においておこなって欲しいと期待いたします。毎年の年会の取り組みはマンネリ化させないようにするのは大変ではと思いますが、続けるということだけでも意味があるのではと考えます。
※	上に記しました。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者 番号	ご要望やご意見
※	このようなアンケートができるようになっただけでも、少しは進歩したのかなと、日本の研究教育が将来的によりいいものになることを信じて。若いころ、研究というフィールドに熱意をもって飛び込んだ私が、日本の大学の研究教育というものの心底失望したのは、それだけ私が研究というものを間近で見るに迫るところまで精進できたからかもしれないと思えばいい勉強になった、と言えるかもしれないが、これらが盛りの、より若い世代の人材には、私のような同じ思いを抱かせたくないとは思っている、こう考えている人間が大学で研究を主催し続けられるかという自身謎である。実際には大学ではなく、より良い研究環境が整っている研究機関で仕事をしていきたいと思う部分もあるので。上層陣の間でのなあな、なれ合いの関係はやめて、科学に対する真摯な姿勢をまず、上の立場にいる人たちから見せて欲しい。
※	この問題に関してまじめに考える人は、じつはそんなことを考えなくてもよくて、こんなアンケートに見向きもしない人が、対象者になる。セミナーが企画されているようですが、聞きに行く人には不必要で、聞きに行かない人には必要なセミナーになるというパラドックスがあると思います。
※	教育をしっかりすべきかと思えます。学生に対してはもちろんです、PIの再教育も含めてやるべきかと思えます。不正の原因が、PIの指導・管理能力の欠如や、PIIによる強迫などのハラスメント行為、PI自身の「このくらいの手心なら不正にならないだろう」というような間違った研究意識が原因になっていることも多々ありますので、不正を行った当事者の問題として片づけるだけでは不十分かと思えます。
※	サイエンスを離れて現世を見る限り、教育も厳罰化もどちらも必要ですが、不正は無くならないでしょう。この無くならない不正を抱えているという現実をどう受け入れるかは、個人の問題かと思われ。
※	安定な身分に甘んじてしまうと成果が出ない恐れもあるが、身分を守ろうとするあまり不正に走り間違った結果を世に送り出すことは科学の進歩にとって有害である。研究不正に意味がない構造づくり重要である。
※	実験上の不正だけでなく、研究費の不正も起きにくい仕組みを構築すべきと思われる。
※	Q13 の回答参照。
※	単に不正はいけませんとか、小学生でも書けそうな文章を流すのではなく、学会としての研究不正に対する考えを明確に表示してから、こういうアンケートをして欲しい。こういうアンケートをしたところで、何も変わらないし、変えないのであろうと思ってしまう。
※	研究倫理は個人の内面にに関わり長い道のりがかかる事柄ですから、比較的短期間に学会が用意できる、不正説明・不正抑止に関する提案を記すことにします。科学研究では、研究記録や実験ノートをきちんとつけることは以前から必須でしたが、近年の研究のデータ量は莫大なものになっています。中でもデジタルデータは、加工が容易なこと、心理的な抵抗が低いことなどから、改ざんなどの不正の温床となっていると思います。そこで、最初の生データから論文の図表にいたるまでの全操作を、後からでも1ステップずつ全て検証できるように、各ステップの全データを(例えば最少10年間)保管する責任を課すこと提言されてはどうでしょうか。学会の主導でデータ保存のための費用を捻出する、あるいは、データ・デポジットのデジタル容量を確保すると言ったサポートも重要でしょう。なお、診療録(カルテ)は、医師法などで5年間の保存義務が課されていて、NMRやCTといった検査データの保存も必要ですから、保存システムとしては今から開発の必要な点はそれほど多くはないと思います。
※	科学の進展を妨害するだけなので、無くす必要があるし、巻き添えを食わないようにする仕組みが必要。

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	十分だった	学会にできることには限界があるので、仕方が内面もある。他の学会に比べれば、良くやってくれる方だと思う。
※	おおむね十分だった	国内では他の学会に先んじて対策を講じて来たと思う。
※	おおむね十分だった	分子生物学会発行の学会誌における不正に関する調査が不十分だったと思いますが、学会大会における取り組みを続けているのは良い点だと思います。
※	おおむね十分だった	よく知りません。
※	おおむね十分だった	学会としては、啓蒙する立場でいいかと思います。
※	おおむね十分だった	〇〇さんの調査報告書は、あの時点で出来ること全てをやっていたと思います。
※	おおむね十分だった	学会で研究不正について考えるフォーラムなどの開催があったので。
※	あまり十分でなかった	十分な教育や問題意識の共有がなされてこなかった。
※	あまり十分でなかった	学会の取り組みは高く評価できるが、不正をすべて発見し処罰するにはいたっていない。より積極的に評価可能なシステムを学会だけでなく、我々現場の研究者を含め、みんなで検討する必要がある。
※	あまり十分でなかった	〇〇〇〇教授が研究倫理について語っていたのは論外で、自分のラボの中で起こっていることが把握できないなら責任著者になるべきではなかった。研究施設に調査を要望している点はずっと評価されて良いと思う。ただ、学会としての調査も可能だと思うが、何故やらないのか。
※	あまり十分でなかった	上述の理由
※	あまり十分でなかった	現在不正の疑いのあるものに関して所属機関に調査するように依頼しているのは評価できると思いますが、不正に関する教育を行っていたものが、不正を行っていたことに関しては評価できない。もちろん見抜けない部分はあると思うが、とある掲示板では何年も前から噂されていた、
※	あまり十分でなかった	もともと、各委員会やワークショップ開催など、おおむね十分な対応がなされていると感じていたが、ワークショップの演者が不正に携わった疑いがあることが明らかになったことには大変驚き、また失望した。このような事態が起きたということは、結果的にこれまでの学会としての対応にも改善すべき点があったのではないかと思う。
※	あまり十分でなかった	泥縄式。責任を取る必要のないpositionの人員であれば一般的な対応なのでしょうがないか。
※	十分でなかった	身内に甘すぎる決定が多すぎる。あまりに粗末な対応に失望し脱会した知人も多い(10名以上)
※	十分でなかった	学会の規模に比してメッセージの周知が十分でないと感じられる。
※	十分でなかった	不正を行っていた研究者が、不正や研究倫理問題のとりまとめをやっていたことを考えると、十分ではなかったと考えられる。それは、本人も悪いし、そのひとを承認した人たちにも責任はある。
※	十分でなかった	そんな事やったところで、根本原因を解決する気がないのなら、「臭い物にふた」「癌にバンドエイド」くらいにしかならない。(いじめとかと一緒に)
※	十分でなかった	不正に関わった人がまだアカデミックにいるから。
※	わからない	学会で取り組む必要がない。
※	わからない	なにをやっていたのかよく知らない。
※	わからない	若手研究者への啓蒙活動は十分と思う。その他の活動についてはあまりよく知らないが、ここ数年の対応は少し過剰かなと思う。
※	わからない	分子生物学会の取り組みについてよく知らないため。
※	わからない	対応をしているかどうかすら知らなかったし、『学会』に相談に行くこと自体が『やばいひと』扱いにつながりそうで(狭い業界なのですぐ話が漏れて個人が特定されそうだし)、特に若手にはリスクが大きすぎる。
※	わからない	これまでの対応についてあまり詳しく知らないから。

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	やるべきである	研究発表の場を提供するのならば、そこで発表される内容に不正はないということを保証すべき。発表の場は提供するが、内容には一切責任を持ちません、というのでは学会としての存在意義が疑われる。したがって、不正には厳しく対応するという意思表示をする上でも、不正対応の企画は必要。
※	やるべきである	知の創造に関わるエリート集団が不正を指摘しなければ誰が指摘するのでしょうか？国の機関に適当な人材がいるとでも？学会の役割だと思います。
※	やるべきである	他にこのような機会はほとんどないから。
※	やるべきである	研究者自身がバイアスをかけるべきではない。
※	やるべきである	学会の存亡にも関わる問題だと思うから。
※	やるべきである	研究不正は研究発表そのものを無意味にしかねない重大な問題であり、研究者個々人は自分の問題として積極的に取り組むべきであるとする。不正にまみれた科学的に無意味な発表が行われる場となってしまうと、学会の存在意義自体が失われてしまう。
※	やるべきである	反対している研究者は、おそらく何らかの研究不正を行っている可能性が高いと思う。
※	やるべきである	不正に基づく研究成果が生き残る方が、将来の科学発展の障害になる。
※	やるべきである	どの程度効果があるかは不明だが啓蒙的な観点から必要かと。
※	やるべきである	「研究者の集まりであるから研究不正対応を控えるべき」という意見は全く論理的ではない。本来専念すべき学術発表において信頼という基盤が失われた今、むしろ学会で学術発表こそを控え、同じ研究分野における不正によって全体が不利益を被るという当事者意識を持ち、真剣にこの問題に取り組まなければならないと強く感じている。
※	やるべきである	学会は学術発表のみに存在するわけではない。むしろこのような議論を行う場である。研究発表だけしてればよいというのは研究者としての傲慢さと自己中心的考えが現れている。
※	やるべきである	学会で発表される内容が不正によって捏造されたものでも良いというならやらなくても良いと思うが、そうすると学会だけでなく、日本の研究自体に未来はない。
※	やるべきである	ただ、教育的な講義を。こういうことをしてはいけません、こういうことは不正・ねつ造になります・あたります、こういったことで悩んでいる場合はこういうところに相談しましょう、ということ提案・講義してあげるのはいいことだと思います。実際の問題対応は第三者機関でやるべきですが、本学会は学術発表のみに専念し、研究不正対応等の企画は控えるべきという人は自身に何かそういったことを周知されたら困るとか、後ろめたいことがあるのでは。
※	やるべきである	そういう場が少ない現状では、多くの研究者が集まる学会で認識を求めていかないと無理。
※	やるべきである	所属している学会としてはどういう見解を持っているか、ということに参加者は知るべきである。他に所属研究室以外の研究者の意見を聞ける機会は若い人ほど少ないのではないのでしょうか。シニアの方でも仲良しグループのように自分と意見のある人同士でしか話をされないのではないのでしょうか。
※	やるべきである	研究不正や倫理に関してのワークショップだけ開催しても人が集まらない。また、研究倫理や不正については大学院の授業でも取り上げられることは少ないと思う。分子生物学会は学生の参加者も多いので、啓蒙活動という意味でもした方が良いと思う。
※	やるべきである	「正しいデータを出す」というのは研究発表の大前提ですから、立派な研究発表のための活動だと思いますので、積極的にやるべきだと思います。発表に専念するのみ、という考えで突っ走ってきた結果が、今の現状だと思います。
※	やるべきである	学会は、数多くの研究者が一堂に会する唯一の機会であり、共通の重要な問題に関する議論はするべき。普段の生活の中では、研究不正などの問題を深く掘り下げる機会はない。
※	やるべきである	特に若い世代(大学院生、ポスドク)にむけて、不正防止への啓蒙と、万が一自分が不正に巻き込まれそうになった時の対処の仕方(身の守り方、相談窓口など)を教える企画が必須であると思う。
※	やるべきである	研究発表・学会参加を行う人すべてに重要な問題だから
※	やるべきである	研究者の個々人が(建前としてであっても)対等の立場で発言できる場で、研究不正の問題を取りあげることは大切です。「学会は研究者の集まりであり、研究発表の場のみを提供するべきであることから、本学会は学術発表のみに専念し、研究不正対応等の企画は控える」というのはあまりに官僚的で恥ずかしい。何やましいことでも...あるん(だれが隠したい)? という強い印象を、普通の人には与えます。
※	ある程度はやるべきである	前述のように、学会は発表内容に対する社会的責任を持つと思うので、最低限研究不正や研究倫理に対して会員の意見集約を行うべきだと思う。
※	ある程度はやるべきである	表面的にやるのは望ましくない。本気で取り組むのであれば、同時時間帯に他のワークショップ等を設けず、可能な限り全ての学会参加者が参加できるようにすべき。

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	ある程度はやるべきである	学会としてある程度考慮していますというアピールは必要だと思う。
※	ある程度はやるべきである	環境づくりとしては、いいと思います。ただし、効果が期待できるかは疑問です。
※	ある程度はやるべきである	やれたほうがいいが、分子生物学会のような大きな学会のワークショップでは参加者は少なく、効果が期待できるのか疑問。ワークショップ以外の皆が必ず目を通す書面でやってはどうだろうか。
※	ある程度はやるべきである	現状では各機関への調査依頼などは続けていくべき。
※	ある程度はやるべきである	学会とは別の日程で、別の場所で、という企画では人が集まりにくいと思います。
※	ある程度はやるべきである	時間的に研究発表と平行に行うのであれば、やるべきではないと思う。
※	ある程度はやるべきである	ワークショップをおこなうのは企画側として聴講者を集めて議題を考えることなど、毎年おこなうのは大変であるのは理解できます。けれども学会としておこなうべきだと考えています。
※	ある程度はやるべきである	ただ、ワークショップばかりでなく、実際に具体的な行動を起こすべき時に来ているのではないのでしょうか。
※	ある程度はやるべきである	学会として努力しているという外向けのアピールをボランティアのかたちで役員の方々がなさってくださっていることに感謝しております。議論したいヒトの場を潰してしまうことは避けた方がよいと思います。
※	ある程度はやるべきである	毎回のようにそれをテーマとして大きく取り上げる必要は無いが、不正の防止の啓蒙という意味でたまにそのようなこととして注意を喚起するのは良いことだと思う。
※	ある程度はやるべきである	分子生物学者は研究者であると同時に、ひとつの職能集団でもあります。専門職倫理という観点からは、自分たちの専門性と社会的存在意義を守るためにも、研究不正にいかに対峙するかを組織として検討、啓発することは重要だと思います。
※	ある程度はやるべきである	女性研究者の育成よりも大事なテーマであると思います。
※	ある程度はやるべきである	他の研究環境にいる方々の意見を聞くことはなかなか難しいと思うためです。
※	あまりやるべきでない	不正を予防するための方法や制度の問題を話し合う機会はあってもいいと思うが、研究発表の機会はより重要だと思う。
※	あまりやるべきでない	やってもいいが、聞きにくい人の為に必要であるという点で有効性に乏しい。
※	やるべきでない	くだらない事を議論するよりも研究費増額を目指して文科省に要望すべき。
※	やるべきでない	日本分子生物学会を「祭りの実行委員会」だと認識しています。お金を払っている参加者が楽しく盛り上がるように努力するのがこの学会の務めであり、ほかの事業には手を出すべきではないと思います。また、手を出したところで、(〇〇先生の一件のように)失敗して嗤われるだけです。巨大会を運営できるという自らの強みに集中していただきたいと心から思います。
※	やるべきでない	おそらく参加する人はそういったことをする心配のない人々であって、(圧倒的過半数を占める)参加しない人々の方が問題なので、やったところで意味がない。
※	やるべきでない	不正に関わった人がまだアカデミックにいるから。現状は不正をしてもアカデミックに残れるという状況なのに、周りが騒いだところで何も変わらないし、そもそも精神衛生上よくない。折角の学会なので、研究のことに集中して議論したい。
※	わからない	ワークショップにするほどのことかなと思います。当たり前のことを学会で、時間を割いて発表するよりも、もっと有益な場にして欲しいです。Q14にも記載しましたが、結局は教育の仕方に問題があると思います。研究室によって、学生にきちんと指導するところとそうでないところがあります。論文を書くことも、きちんと指導すべきことなのに、指導できていない。挙句、論文を書けないのは学生の素質の問題とはき捨てる教育者が大学の中に沢山いるのも事実です。その教育の現状をワークショップにし、研究教育を正すものにして欲しいです。教育をきちんとすれば、正しく研究を遂行することの重要性が学生にきちんと伝わるはずで
※	わからない	結局、時間的に参加できないタイミングで行われても意味はない。毎日あるなら、意味があるかも。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由
※	PIの倫理教育	PIがしっかりしてれば、下もしっかりしてるはず。若手教育なんて言って若手に責任転嫁するのではなく、PI自身が自らを省みる必要がある。
※	PIの倫理教育	PIが一番若手に対して接する時間が多く、おそらく一番影響を与える人間だと思います。
※	PIの倫理教育	不正の根本的問題はPIにある。PIは若手を指導できるが、若手はPIを指導できない。PIを教育しなければただのその場しのぎの対処でしかない。そもそもPIの倫理観はPIが思ってるよりもずれている。強い影響力を与えるPIほど裸の王様になる可能性がある。躊躇なくPIを指導すべきだ。
※	PIの倫理教育	大学という高等教育機関で、あきれようなアカハラ・パワハラが行われており、PIは追放されず、弱者である被害者が泣き寝入りするという話があまりにも多いので。テニユアな大学教授ももっと容易に解雇できるようにするべき。PIが研究業績だけで選ばれるのも問題。人間性が全く考慮されていないのだろうか？勤務時間中に平気でジムにいったりしている。
※	研究不正の背景	なぜ起こすのかの原因を減らすことが最も重要。
※	研究不正の背景	構造的な問題だと思うから。
※	研究不正の背景	若手の倫理教育という選択肢に疑問。不正を行うのは若手だけ?? 将来を見越してのことだと思いますが、...
※	研究不正の背景	結局その原因となるものがわからないと根本的な解決につながらないから。個々人の倫理教育は全体として行っても殆ど効果はないと思う。
※	研究不正の背景	背景について深く踏み込んで調べて論じる事には、根本原因(実は明らかだが)が明るみに出るかもしれないので、ある程度は意味があるかもしれない。(ただし、結果を政府等への提言やメディアへの発表等に結びつけられれば、...)
※	その他	聞きに来る人は不正をしない人である(中には例外もあるかもしれませんが、...)。なので不正をしない人に必要なのは、不正をしたと疑われないためのデータの保存方法などの工夫をディスカッションするのは有効かもしれません。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景	特にPIへの倫理教育を進めるべきである。
※	若手の倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	すでにその素養があるPIの再教育は実際は難しいので、そうしたPIや指導者だった場合の若手の対応策を企画する。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	数年前か、貴学会で画像処理の正当性についてレクチャーするワークショップかセッションがあったはずかと思いますが、その座長をしていた先生が去年か一昨年前に、長年にわたるデータねつ造で解雇されていました。教育する側がそんな様子では困ります。まずは自身の身が安泰となって独裁政権的になっている前時代の人達に、時代は変わったので、そういうことをすると問題になるということを本気で教育して欲しいです。ねつ造しろ! といっていないくとも、その背景にはねつ造を強要しているとも思える強烈な圧迫があり、ハラスメントの背景があるなどということを、身を切って教えてあげてください。
※	若手の倫理教育/研究不正の背景	研究不正への対応についてはあまり身近な問題と思えない。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	研究内容や研究費に関して大きな権力を持つ立場の人間こそ、しっかりとした倫理教育を受けるべきである。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	私が思うに、若手は不正はしません。研究に対してピュアで、真剣だからです。むしろ不正の源はラボを仕切っているPIの方の問題だと思います。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	不正が起きない環境を作ること大事。同じテーマを複数人に渡さない。テーマがオーバーラップしないように住み分けをきちんとする。プロジェクトの進行に早い遅いがあるのは仕方がないこと、どのプロジェクトが当たりなのかは誰にも解らないことだと言っておく。特に、学生の間は、結果が出ないことで本人を追いつめたりすることがあってはならない。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	倫理だけでなく、どのような接し方をすると人をそのような行為をする心理になるかななどを習得していただきたい。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	若手はPIから教育される立場であるため、まずPIを教育し、PIが責任を持って若手を教育していくべきと思われるから。
※	PIの倫理教育/研究不正への対応策	PIのスタッフに対する態度が不正を導く可能性があるため。
※	PIの倫理教育/その他	精神衛生上よくない。折角の学会なので、研究のことを議論したい。
※	PIの倫理教育/その他	「人の振り見て わがりふ直せ」
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	原因調査と対応を適切に行えば、個人の倫理感に頼らずとも不正は無くなるのではないだろうか。若手とはいえ成人に倫理教育をおこなうことは容易ではない。倫理感の欠落した者に対しては厳罰処理しかないのではないだろうか。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	今更大人に倫理教育をしてもほとんど意味が無いと思う。具体的な原因や対応策について議論する方が良い。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者 番号	回答	選んだ理由
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	教育と実例の紹介、やることのおろかさを説く会があるのはいいと思う
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	不要な議論などない。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	不正に手を出す理由は一つでは無いと思う。自分が目立ちたい、偉くなりたいという気持ちから。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	若手を指導するのも大事だが、それを許す状況や、プレッシャーを与えるPIにもしっかりと教育が必要だと思う。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	不正は、誰かが一方的にやるものでもなく、理由もなくやるものでもありませんから、若手・PI問わず、背景から対応策まで学ばせるべきだと思います。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	1~4を全てやらないと、結局状況は良くならないと思うので。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者 番号	その他記述
※	研究不正のその後
※	研究者の相談先の提示。上司の息のかからない外部機関への相談機関が知りたいです。
※	研究不正と言われないために必要な準備
※	本質的には、論文に依存しない、業績評価基準が必要なんでしょうけど、今の時点では早急かもしれません。
※	罰則規定をはっきりさせるべき。
※	企画を中止してほしい
※	結局は不正は「ばれる」ということを具体例をだして史料とする。
※	研究不正の実態と将来への教訓

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者番号	回答	選んだ理由
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	有識者
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	どのように対処したか、事後の対応策などを、実際に対応した人の生の声を聞いてみたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	匿名でよいかから、不正をした人の意見や背景を出して欲しい
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	調査過程が知りたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	選択肢の中なら、不正の背景を、よく知っているような気がするので。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	当事者に近いところがよいと思うから。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	不正が行われた原因・背景と明らかとなった後どのような対応策を立てたのか、立てるべきなのかを、広く意見を求めることが再発防止への足がかりとなるのではないだろうか。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	実際にどのように対応したか、良かった点と悪かった点を示した話を聞いてみたいと思います。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	実際にどのような感じで調査が進められるのか、またその研究室(メンバー)はその後どうなるのかが知りたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	調査関係者が一番近くで実際におきた研究不正を見てるので。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	不正の当事者の考えを聞きたいところですが、難しいので、調査を行った人と意見を交わしたいです。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	一番現場で関わった人の話を聞くのが最も効果的だと思うから。
※	トップジャーナルの編集者	ジャーナルとしての対応と過去の実例を聞きたい
※	トップジャーナルの編集者	意見を聞いてみたい。
※	研究費助成機関	対応がまだまだ甘い。不正の内容にもよるが、研究費を助成する機関は、たった一度の不正すら許さない、二度目は無いという態度でなければならない。
※	研究費助成機関	不正が発覚した時の助成機関の対応をしりたい。
※	その他	いずれも討論の場に必要なたたき手であるが、当事者がいなければ話にならない。裁判をしようというのではないのだから、少なくとも不正を行った当事者が学会に対してメッセージを出す意思があるかどうかだけでも確認すべきである。
※	その他	研究にかかわっている人間間では、業界の狭さゆえ、本当の議論がしにくい。研究に関わらない第三者が、提案する形で、討論、というよりも講義を聞くというスタイルの方が、参加しやすいかと思う。
※	その他	暗い話を暗い雰囲気ですら、全員の元気がなくなると思います。なんでもいから笑い飛ばすほうがいいでしょう。
※	その他	飲酒運転でクビになるんだから、不正でもクビにすべきなので、その辺の罰則規定に関する決定権を持っていそうだから。
※	その他	それぞれの立場の人がそれぞれの考えを率直にぶつけ合うのが良いんじゃないんですか。よく知らないけど、、、
※	その他	ワークショップの開催意義はそもそもない。ただやるとしたら、周りが騒いだところで、歪んだ話しか出てこないのだから、当事者(告発者と不正を犯した人もしくはグループ)の話を知りたい。
※	その他	国内でのキャリアのみを指向する研究者には、本音を出すのはハードルが高いと思います。

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者 番号	その他記述
※	不正した研究者。
※	不正の張本人
※	不正を行った当事者
※	不正を行った人で、未だに内容が明らかになってない人。〇元〇大教授等
※	第三者からのケーススタディー報告的なスタイルの方がいいと思う。
※	上記すべて。あと、学会の責任者だけでなくいわゆるでかい研究費の審査をやるような偉い先生たち。
※	不正をしたとされる〇〇さんや、〇〇さんをよんできて、好きなだけしゃべらせてください。
※	文科省の役人
※	2, 3, 4
※	不正した人(グループ)不正を見抜いた人、もしくは不正の解説ができる人
※	不正を行った本人
※	〇〇〇〇
※	外国籍(在日外国人)の研究者。日本で生まれながら、海外に活躍の場を求めた研究者。コーポレート・ガバナンスに詳しい弁護士。

質問20. 第36回年会のワークショップの内容に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	1. 分子生物学会は〇〇某教授を持ち上げていた責任を痛感すべきである。2. 研究者を目指す大学院生には、研究倫理の講義を課すべき。3. 研究倫理に関わる点でPIが果たすべき責任について、学会で見解を出すべき。
※	ワークショップを意味あるものにして下さい。
※	ワークショップは時間的にもキャパシティ的にも参加者が限られているので、終了後に内容を周知させるような方法を講じて欲しい。
※	研究不正については、研究者全員が深く関心を持っていることだと思うので、年会でのワークショップを含め、討論内容、発言内容、意見など、できるだけ細かい内容も含めてウェブ等多くの人が読むことのできる方法で公開していただければと思います。
※	ポスター発表の時間とぶつかけられると、人が集まらないと思います。ポスター発表で研究の議論をする方が重要だからです。
※	まあ、基本的には何も変わらないと思うが。
※	まず、近年不正を行った人の例を实名付きで詳しく紹介した方がいい。そうやって晒し者にすることで学会内での立場を悪くさせる。そういう行為を行うことがいかに良くないかを「今は」不正していない学会員にわからせる。
※	これまでの対応から全く期待していない。
※	お説教や批判の投げ合いは勘弁していただきたいです。そんな暇があるのなら、会場周辺のゴミ拾いでほしい方がよほど役に立つと思いますよ。
※	ネガティブなことを取り締まりではなく、その原因や改善方法を議論する方が将来性があると思います。ですので、やっただめだ、こんなひどいことがある、ではなく、どうやって良くしていこう、というポジティブな視点のワークショップにして欲しいです。
※	これまでにどのような不正が生じていたのかを知りたい。
※	過去にあった不正の具体例を挙げ、発覚から調査の終了、その後の処分などをまとめたものをつくる。
※	どれが不正でどれが不正でないかの教育的な企画。
※	研究不正や捏造か否かの線引きは難しい。例えば、良い結果のみを選ぶ(予想に反した結果が出た実験区は失敗であったと見なす)場合は捏造となるのか。また、学生が出した明らかに怪しい結果をそのまま採用することは、PIの不正になるのか。研究者がどのような意見を持っているのかを広く問うてみたい。また、身近でおきた不正(もしくは不正未遂)に伴う出来事(捏造を拒否・告発したことで、研究室内で嫌がらせを受けた、身分更新を断られた)などがどの程度起きているのかを調べてもらいたい。
※	不正を行った当事者が職を追われフェードアウトするというのではいつまで経ってもこの問題はなくなる。分子生物学会に所属しこれまでも研究発表を行っていた科学者が不正を行ったというのであれば、学会はその当事者に対して他の会員全てに向け当該の不正について説明させる義務があると考えます。
※	前にもあったかと思うのですが、若手の人間から実際に困った現状を事前に匿名でWebなどから報告してもらい、Q&A形式でその現状が妥当か問題があるか解説したりするなど、わかりやすいワークショップになればと期待しています。
※	歴史が示すように不正は絶対になくならない。それを最初にしっかり認識すべき。不正が必ずあるという前提で、その数を減らす、あるいは影響を最小にすることを現実的に議論すべきだ。不正の実行犯は若手研究者であるからそちらに目がいくが、実際には研究主宰者であるPIの責任をもっと強く意識したほうがいい。不正は倫理観が強く関わる。そして倫理観は文化と強く関わる。なので根本的文化が異なる欧米と比較あるいは模倣しても意味が無い。むしろ日本独自の不正に対する強い意志をサイエンスのコミュニティにアピールすべきだ。そして不正対処における模範となれるようにしっかりと地道に築き上げるべきだ。
※	スーツ禁止。かきこまって話し話されるよりも、私服でざっくばらんにそれぞれのサイエンスに関して熱く議論が話し合われる場であってほしい。むかしの面白かった時代の分子生物学会は、あまりスーツを着ていなかったと聞いている。普段、研究室にいるような感覚であって良いのでは。。
※	科学論文の不正は、当事者ばかりでなく、日本の研究の根幹を揺るがすものですので、今後とも積極的な対応をお願いしたいと思います。
※	昨年の大会では、急きょ研究倫理のセッションが開催されたために、裏番組になってしまったフォーラムを企画していて、大変迷惑しました。行うのであれば、直前に場当たりに実施するのではなく、事前にきちんと計画して実効性のあるイベントにすべきだと思います。イベントを開催すれば「倫理的」「不正に対応している」と世間がみてくるとしたら大違いです。ワークショップで議論された内容を学会運営と学会誌の査読、編集体制などにいかに反映できるか、という点を意識した企画を希望します。
※	PIの人間性教育についてのワークショップ。民主党政権下で提言された「2020年までに理工系博士課程修了者を完全雇用するというセーフティネットの構想」はどうか?についてのワークショップ。これらも是非やって欲しい。
※	どうせやるなら、「臭い物にふた」「癌にバンドエイド」とどまらない、根本的原因に踏み込める様なワークショップにして下さい。
※	かつて分子生物学会のワークショップで不正の禁止を呼び掛けていた人が深刻な不正を犯していたという現実をもっと深刻に受け止めてほしい。そのワークショップを聴講した者からすると、何を信じていいか一瞬分からなくなった。ワークショップよりもやるのがほかに沢山あると思う。不正に関わった人が処罰(懲戒免職)されずにまだアカデミックにいる。氷山の一角が見つかっただけでワークショップなどしていたら、次に発見されるであろうより深刻な不正が見つかった時、分子生物学会は何をするのであろうか。分子生物学会を解散するのだろうか。不正は犯罪であり、犯罪を犯した人は社会から隔離されるべきである。
※	議論を未来へ先伸ばしするのだけはやめてほしい